

氏名（本籍）	新井 雅（北海道）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	博甲第 7133 号
学位授与年月	平成26年 8月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	心理専門職によるアセスメントを基盤とした 教師との協働的援助に関する研究

主査	筑波大学 教授	博士（心理学）	庄司一子
副査	筑波大学 教授	医学博士	水上勝義
副査	筑波大学准教授	博士（文学）	岡本智周
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	山田一夫

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、学校教育において、心理専門職が教師や他職種の専門職と協働して生徒の援助を行う際の事例アセスメントに関する研究である。学校教育において心理専門職が生徒の援助を行う上で、教師や他の専門職と協働する中で事例のアセスメントをいかに行うかは非常に重要である。しかし、協働的援助の上での事例アセスメントに焦点をあてた研究はほとんど行われていない。先行研究を踏まえ本研究の課題として次の点があげられた。第一に、事例アセスメントは、(1)事例の情報収集、(2)情報の解釈、援助方針の計画、(3)援助後の事例変化の把握、からなるプロセスと考えられ、プロセスに沿った職種間の専門的視点の比較検討、第二に職種間のアセスメントを共有し円滑な協働につなげる実践方略の探索、第三に現実の援助場面を想定し、心理専門職と教師のアセスメントの相互作用の検討、第四に、教師との協働を促進する心理専門職の教育訓練に関する検討、である。これにそって、研究1は、アセスメントの意思決定プロセスの観点から心理専門職と教師の専門的視点の特徴を比較検討すること、研究2はアセスメントの共有方略が職種間の協働的援助に及ぼす影響を検討すること、研究3は協働的援助の過程における心理専門職と教師のアセスメントへの影響・変容を明らかにすること、研究4は「教師と協働するための心理専門職のアセスメント実践」に関する教育訓練プログラムの効果を検討すること、を目的とした。

本研究は以上の4点を検討し、アセスメントを基盤として心理専門職が教師と協働し、学校不適応事例への効果的援助につなげる示唆を得ることを目的とした。

(対象と方法)

研究1はSC・心理教育相談員10名、担任教師8名、養護教諭9名を調査対象とし、半構造化面接を実施し、他職種と協働した援助経験の中で、アセスメントプロセスにおける各職種の視点の特徴を尋ねた。

研究2では対象は中学校SC96名、教師322名でアセスメントの共有方略、集団内葛藤対処行動、チーム内葛藤、教師とSCの協働に関する尺度を用い郵送法により質問紙調査を実施した。研究3では教師11名とSC・教育相談員10名を対象に半構造化面接を実施した(3-1)。同一事例への協働経験を有する中学校SC6名と教師13名を組み合わせ、研究3-1と同様の面接を行った(3-2)。事例は10件であった。研究4では大学生・大学院生22名を対象に心理支援者役、教師役に分け、ロールプレイ実習のプログラムが実

施された。

(結果)

研究1で心理専門職と教師の専門的視点の特徴を比較検討した結果、教師は客観的な情報を収集し、具体的な援助方針を立て、行動の変化を捉え、心理専門職は心理面の情報を収集し緩やかな援助方針を立て、環境の変化を捉え、養護教諭は身体症状などの情報を収集し、保健室で安心感を提供し、症状や来室状況の変化を捉えるなどの特徴が明らかとなった。研究2ではアセスメントの共有方略が職種間の協働的援助に及ぼす影響を検討した結果、「他の教師を通じた意見調整」は職種間の葛藤を上昇させ、「積極的かつ迅速な情報・意見交換」は協働を促進することが示された。共有方略の組み合わせで対象者を群分けしたところ、様々な共有方略を用いる群や「積極的かつ迅速な情報・意見交換」を活用する群は職種間の協働状態が良好であった。積極的で迅速な情報・意見交換を行うこと、教師と苦労や困難を分かち合える関係を築くこと、事例理解や援助方針が相互に異なる場合、緩やかな方向性の共有、共に対応する方略が必要であることが示唆された。研究3では協働的援助の過程での心理専門職と教師のアセスメントへの影響・変容として、両職種共に相互の専門的視点に影響を受けながら自らの事例理解の視点や枠組みを変容・拡張させ援助を展開することが示された。心理専門職は教師と異なる専門的視点を提供するゆえに教師の事例理解に肯定的な変容を促すが、逆に援助を阻害する場合もあり、心理専門職も教師の視点を取り入れる柔軟性が求められることが示唆された。研究4の結果、心理支援者役はアセスメントの共有の難しさを体験した一方、教師役との情報交換で生徒理解が深まること、教師を尊重した対応で事例検討が円滑に進むこと、具体的な援助方針を立てることの重要性が体験された。これにより他職種との関わりが事例理解を深め、自らの視点・考えを振り返る機会となること、事例理解・援助方針をすり合わせ共有するコミュニケーション方法を模索することが重要であり、それらを体験的に学習する重要性が示唆された。

(考察)

本研究より、学校教育場面の専門的援助において、心理専門職は教師との専門的視点の違いを認識し、職種間の特徴を補い合い、互いの考えを共有し、両職種の視点を混合した事例理解や援助方針を発展させることで学校不適応事例への効果的援助につなげる可能性が示唆された。教師との協働につなげる心理アセスメントの実践、協働的援助のための効果的な教育訓練プログラムの有効性も示され、プログラムの一層の精緻化が求められる。

審査の結果の要旨

(批評)

学校教育場面における心理専門職であるスクールカウンセラーと教師の連携、協働的援助に関する研究は多々あるが、「アセスメント」をキーワードとした連携、協働についての研究は従来ほとんど行われて来なかった。本研究によってアセスメントが事例援助における専門職間の協働においてどのような役割を果たすか、職種のアセスメントの特徴が明らかにされ、また協働における事例アセスメントの影響、相互作用、さらには心理専門職への協働に関する訓練プログラムの効果について示唆を与えた。本研究は学校教育現場における児童生徒の援助において心理専門職の果たす役割、効果を向上させる上で示唆に富む研究であり、博士号を授与される論文として一定の水準にあると判断された。

平成26年6月30日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。